

## 最後の晩餐

井口昭久

「食に関するシンポジウム」で基調講演をした。討論の時に「先生は最後の晩餐ばんさんに何を食えますか？」と、司会者に訊かれた。私は、死ぬ前には食欲がなくなることを知っているので、「何も食えることができないと思う」と言うと、司会者は困惑した表情になった。

私は付け加えた。「最後の晩餐とは、キリストの処刑を前にした食事のことで、健康な食欲を持った人が人生で最もおいしかった料理を食べるといことだと思えます。そういうことなら私は親子丼を食べたい」。

今から7年ほど前に、私は国立大学病院の病院長をしていた。国立大学病院が独立法人

だちは、最後には病院長の私に向けられた。

病院長に直接会って不満をぶつけたい職員は多かった。不満を抱えた家族や患者も院長に会いたがった。私は病院の中を歩けば、地雷を踏むのではないかと思った。

病院での問題は、それに応じた委員会ができており、その委員会で決まる仕組みになっていた。しかし委員会でも拒否され、事務からも相手にされなかった案件を持つ者は、病院長に直訴しようとした。

昼間は怖い秘書がいて、病院長に会うことはできない。電話も秘書が受けるので院長が直接対応することはない。しかし5時を過ぎると事情は変わった。院長の周辺には誰もいなくなった。電話には院長が直接対応することになった。

電話に出ると患者からの苦情ばかりである。職員の対応が悪い。清掃がなっていない。職員は、人を増やせ、場所を増やせと言って院長室へ現れた。人は病院長という「役職」に

化された時の初代の院長であった。独立法人化とは、経済のことなど考えたこともなかった医学部の教授たちに、「これからはお金を稼かせぎなさい」ということだったので、うまく答こたえがなかった。

その頃ころは小泉改革で社会もいらだっていた。マスコミは医療事故を競って記事にした。医療事故が起こると、私はテレビカメラに向かって深々とお辞儀を繰り返した。そのおかげで私が病院長であるということを知った看護師が多かった。

病院に勤務する医師も看護師も技師も、事務職員も気持ちが悪くさんでいた。彼らのいら

は容赦ない言葉を吐いた。たとえばデモ隊の人たちが発する言葉のように。私は、疲れてしまった。5時を過ぎると病院を退散することにした。



スーパーで鶏肉と卵を買って、家に帰った。昆布と鰹節かつおぶしで出しをとり、みりんと酒と醤油で汁を作った。ビールを飲みながら、じっくりと親子丼に取り組んだ。若い頃、生化学の実験を仕事にしていた時期があったので、「物質が温度の変化と時の経過によりどのような化学変化を遂げるか」という課題に関しては熟練工であった。

親子丼を作れるようになり、最後の晩餐にしたいと思うようになったのは、そういうわけである。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)